

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370503

研究課題名(和文) 19世紀ドイツにおける標準語と日常語の混交に関する言説の社会語用論的研究

研究課題名(英文) Discourse on the interaction of standard language and vernacular speech in 19th century Germany. A sociopragmatic study.

研究代表者

高田 博行 (Takada, Hiroyuki)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：80127331

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀に公的場面に参加し学校教育を受ける機会を得た一般大衆は、それまで教養層に独占されていた標準語を獲得した。その際、国語授業の目的は標準語の正しさよりは、言語分析による論理的思考力の養成であったことが、標準文章語の平準化を進展させた。新聞というメディアに目を転じてみると、日刊紙が19世紀において幅広い社会層に普及したことも、標準文章語の民主化の一因となった。

研究成果の概要(英文)：In the 19th century, the masses got the opportunity to receive school education, participated in public scenes and acquired the standard language which had been monopolized by the educated class. The main purpose of (national) language education was not to teach the German normative language, but to train the logical thinking by linguistic analysis. This promoted the levelling of the standard language. As for the medias in the 19th century, the spread of daily newspapers to a wide range of social classes also contributed to democratization of standard written language.

研究分野：ドイツ語史

キーワード：ドイツ語史 言語規範 話しことば 書きことば 国語教育 大衆化

1. 研究開始当初の背景

本研究のように言語史を書き手(話し手)と読み手(聞き手)の社会的・状況的コンテクストと関連づけて考察する立場を、P. von Polenz (1991) は「社会語用論的」(soziopragmatisch) 言語史研究と呼んだ。このアプローチは、「歴史語用論」(A. Jucker、I. Taavitsainen 等)と「歴史社会言語学」(J. Milroy、S. Romaine 等)の両者を包括するものと言える。社会語用論的言語史研究という用語法には、言語変化に関してどこか機械的な分析を行うのではなく、言わば回り道、脇道、さらには袋小路に入り込むような言語変化の実態を解明することで人の顔が見えるような言語史分析を行うぞという固い意志が込められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次の3つの問題提起として示すことができる。

- (1) 音韻、文法、語彙のなかで、それぞれどのような言語形式がそもそも日常的(口語的)と意識されたのか、またその意識はどのように変化したのか?
- (2) 特定の日常的言語形式が標準語に受け入れられた際、その受け入れはそれぞれどのような社会的・状況的コンテクスト(例えば、誰が誰に対して何の目的で書くのか、また話すのかという関係のありかた)において可能となったのか? また、受け入れはそれぞれどのような社会的・状況的コンテクストにおいて許容されなかったのか?
- (3) 標準語の平準化には、当時の社会状況の変化に合致した「言語の進展」という評価が与えられたのか、それとも「言語の墮落」、「誤用」といった否定的評価しか与えられなかったのか?

3. 研究の方法

従来のドイツ語史記述においては、ドイツ語が標準語へ規範化される過程、つまり言語

変種に社会的上下の序列づけがなされる「垂直化」(O. Reichmann 2003)の経過に焦点が当てられてきた。しかし本研究では、標準語が日常語と混交することで口語化し平準化(水平化)する過程に注目する。標準語が平準化していく過程は、同時代の思想家、言語学者、文学者、教育学者、学校教師、またジャーナリストたちによって観察され書き留められている。これらの言説(メタ言語的発言)を詳細に検討することで、標準語と日常語の関係性の変化に伴う言語意識の変化を読み取る。

本研究は、当時の言説の分析によって言語意識(の変化)を再構成することを通して、標準語と日常語との混交が19世紀ドイツで持ち得た社会語用論的意味を解明する。

4. 研究成果

- (1) 19世紀に公的場面に参加し学校教育を受ける機会を得た一般大衆は、それまで教養層に独占されていた標準語を獲得した。標準語と日常語に関する1840年までの言説(メタ言語的発言)をコーパス化し分析してみると、プロイセンの学校教育において1830年頃までは、アーデルングに代表される18世紀の規範文法が支配的であったことがわかる。しかしその後は、正しい標準ドイツ語を一義的に教えようとする規範文法は、生徒の思考力・論理的把握力を養成しようとする論理文法に取って代わられていった。商工業、科学の発展のために国民を「陶冶する」ことが学校の役割と認識され、この養成に応えるべく、国語授業は標準語の正しさを教えるのではなく、言語を論理的に分析することで思考の論理を教えることであると認識された。学校における文法のパラダイムがこのように変化したことが、標準語と日常語の混交による「文章語の民主化」、すなわち標準語の平準化を進展させた一因であると考えられる。
- (2) 19世紀に入ってプロイセンは、農制、軍政、教育制度など一連の近代的な改革を行い、

教育全体のシステムを人口増加と産業化に対応させる必要があった。そのため、母語と外国語の教育によってコミュニケーション能力を高め、自然科学の教育によって技術力を養成することが求められた。1830年頃までは、学校教育においてまだ規範文法が支配的であったが、しだいに、生徒の思考力を養成するような文法が要請された。1830年代は、指導権が貴族、教会、王室にはなく、商業、工業、科学の手に移りゆく時代へ転換した。この進歩主義の要請に応えられたのは、論理文法であった。19世紀半ばには、論理文法が開花する時代が到来した。

(3) 新聞というメディアに目を転じてみると、日刊紙が19世紀において幅広い社会層に普及したことも、文章語の民主化の一因であると言える。文化的・政治的エリートである教養層向けに刊行されていた新聞メディアに、1830年代からは大衆向けの娯楽紙も加わった。この時代の言説を分析してみると、新聞記事で用いられた平準化したドイツ語は、同時代の教養人たちによる激しい批判的になっていたことがわかる。18世紀の古典派作家の言語を模範と見ていた教養人たちは、語彙や文構造のことを考えず、筆のおもむくままに「書き散らす」新聞記者のドイツ語を、読み手に悪影響を及ぼすものであるとみなしたのであった。

(4) 19世紀後期の作家による作品を対象に、当時の日常的な「話しことば」の描かれ方を通じて、当時の言語意識を調査した。フォンターネの『ナシの木の下に』(1885)を対象に、文学作品に基づく言語意識史研究の問題点を考察した結果、文学作品における「話しことば」的な変種は、作中人物の特徴づけのために用いられる傾向があり、作中で描かれる時代・地域に関する言語意識を純粋に反映しているとは言えないことが明らかになった。また、シュトルムの『人形つかいのポーレ』(1874)も調査し、両作品における会話

文と地の文の統語構造を比較した結果、両作品ともに、会話文では、なるべく従属文を避け、8語以内の短文を好む傾向がみられ、また地の文にはみられない文法的に不完全な文が使用されているなど、「話しことば」的な言語現象がみられた。こうした傾向は、同時代人が抱いていた日常的な会話文に対する共通認識の一例といえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計15件)

高田博行「辞書のなかの語用論 18世紀ドイツにおける日常語への眼差し」高田博行・小野寺典子・青木博史編著『歴史語用論の方法』ひつじ書房、印刷中。

高田博行「『社会語用論』的言語史記述の拓く言語生活 ドイツ語史研究の事例に則して」『KLS Proceedings』(関西言語学会)第37号、印刷中。

高田博行「ヒトラー演説における『女性』母親という位置づけから総力戦の労働要員へ」高見健一・行田勇・大野英樹編『不思議に満ちたことばの世界』開拓社、2017年、140-144ページ。

細川裕史「19世紀のドイツにおける『日常語』の統語構造 文学作品に基づく会話史研究の試み」『研究論集』(学習院大学ドイツ文学会)第21号、2017年、45-64ページ。

細川裕史「娯楽としての犯罪報道 19世紀中期ドイツにおける新聞の一断面」『独逸文学』(関西大学独逸文学会)第61号、2017年、115-132ページ。

細川裕史「歴史会話研究の諸相 新約聖書を一例として」『阪南論集 人文・自然科学編』(阪南大学学会)第52巻第1号、2016年、37-51ページ。

細川裕史「舞台の上のジャーナリスト 近代ドイツ喜劇におけるジャーナリスト

像とその言語意識』『阪南論集 人文・自然科学編』(阪南大学学会)第 51 巻第 3 号、2016 年、285-296 ページ。

渋谷勝己・家入葉子・高田博行「歴史社会言語学の基礎知識」、高田博行・渋谷勝己・家入葉子編著『歴史社会言語学入門 社会から読み解くことばの移り変わり』大修館書店、2015 年、5-42 ページ。

高田博行「19 世紀の学校教育におけるドイツ語文法 ドゥーデン文法(1935 年)にまで受け継がれたもの」、高田博行・渋谷勝己・家入葉子編著『歴史社会言語学入門 社会から読み解くことばの移り変わり』大修館書店、2015 年、177-198 ページ。

高田博行「ヒトラー演説と大衆」、浜本隆史編『欧米社会の集団妄想とカルト症候群』、明石書店、2015 年、319-340 ページ。

細川裕史「ヒトラー・ユーゲントの洗脳」、浜本隆史編『欧米社会の集団妄想とカルト症候群』、明石書店、2015 年、293-317 ページ。

高田博行「ドイツ語 造語力に裏打ちされた言語」、宮田眞治・畠山寛・濱中春編著『ドイツ文化 55 のキーワード』、ミネルヴァ書房、2015 年、4-7 ページ。

細川裕史「ドイツ語圏における政治的カトリック系新聞の誕生と発展」、『阪南論集 人文・自然科学編』(阪南大学学会)第 50 巻第 2 号、2015 年、11-20 ページ。

高田博行「ドイツの魔女裁判尋問調書(1649 年)に記されたことば - 裁判所書記官の言語意識をめぐって」、金水敏・高田博行・椎名美智編『歴史語用論の世界』、ひつじ書房、2014 年、105-132 ページ。

Hirofumi Hosokawa “Die Mikro- und Makro-Struktur der ersten deutschen illustrierten Zeitung. Eine soziolinguistische Untersuchung zu Leipziger „Illustrierte Zeitung“ Manshu Ide (ed.) *Sprache an medial-technischen Schwellen. Die Sprache*

ändert sich, aber wie? (日本独文学会研究叢書、No. 100)、31-43 ページ。

[学会発表](計 8 件)

高田博行「ヒトラーの魔術? 大衆を支配することば」(招待講演)、如水会、一橋フォーラム、「ポピュリズムを考える - 岐路に立つ民主主義」、2017 年 3 月 7 日、如水会館。

Hiroyuki Takada “Der Umgang mit der Umgangssprache. Politeness und Gesprächsanalyse bei J. Ch. Adelung im späten 18. Jahrhundert.“ FWF-JSPS Bilateral Joint Research Seminar „Historical Socio-linguistics“ (国際集会)、2016 年 9 月 14 日、オーストリア・ザルツブルク大学。

Hirofumi Hosokawa “19th century popular writings in German.” FWF-JSPS Bilateral Joint Research Seminar „Historical Socio-linguistics“ (国際集会)、2016 年 9 月 14 日、オーストリア・ザルツブルク大学。

高田博行「Adelung の『ドイツ語辞典』(1793-1801 年)に見る社会と発話場面 人の心と顔が見えるドイツ語史既述に向けて」、ひと・ことばフォーラム 第 18 回研究会、2016 年 7 月 2 日、東洋大学。

高田博行「『社会語用論』的言語史記述の拓く言語生活 ドイツ語史研究の事例に則して」、関西言語学会第 41 回大会、2016 年 6 月 11 日、龍谷大学。

細川裕史「新聞における『第三帝国』の言語 キリスト教との類似性および話しことば性の観点から」、京都ドイツ語研究会、2015 年 12 月 12 日、キャンパスプラザ京都。

細川裕史「文学作品にみられる『日常語』の統語構造 19 世紀ドイツの文学作品に基づく言語意識史の試み」、日本独文学会秋季研究発表会、2015 年 10 月 3 日、鹿児島大学。

細川裕史「文学作品に基づく言語意識史研究の試み」、阪神ドイツ文学会第 217 回研究発表会、大阪大学。

溝井裕一・細川裕史・齊藤公輔「想起する帝国 ナチス・ドイツにおける『集合的記憶』に関する考察」、日本独文学会秋季研究発表会、2014 年 10 月 11 日、京都府立大学。

〔図書〕(計 8 件)

高田博行・小野寺典子・青木博史編著『歴史語用論の方法』ひつじ書房、印刷中。

溝井裕一・細川裕史・齊藤公輔編著『想起する帝国 ナチス・ドイツの「記憶」の文化史』勉誠出版、2017 年、全 307 ページ。

千石喬・高田博行編『グリム兄弟言語論集』ひつじ書房、2017 年、全 379 ページ。

イェルク・キリアン(細川裕史訳)『歴史会話研究入門』ひつじ書房、2017 年、全 272 ページ。

高田博行・渋谷勝己・家入葉子編著『歴史社会言語学入門 社会から読み解くことばの移り変わり』大修館書店、2015 年、全 243 ページ。

金水敏・高田博行・椎名美智編『歴史語用論の世界 文法化・待遇表現・発話行為』ひつじ書房、2014 年、全 300 ページ。

高田博行『ヒトラー演説 熱狂の真実』中央公論新社、2014 年、全 286 ページ。

Hirofumi Hosokawa: *Zeitungssprache und Mündlichkeit. Soziopragmatische Untersuchungen zur Sprache in Zeitungen um 1850.* Frankfurt am Main et al.: Peter Lang, 2014. 全 282 ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 博行 (TAKADA, Hiroyuki)
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：80127331

(2) 研究分担者

細川 裕史 (HOSOKAWA, Hirofumi)
阪南大学・経済学部・准教授
研究者番号：60637370

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

佐藤 恵 (SATO, Megumi)
学習院大学・大学院・人文科学研究科
博士課程後期、日本学術振興会特別研究員
(DC1)

鯨岡さつき (KUJIRAOKA, Satsuki)
学習院大学・大学院・人文科学研究科
博士課程前期

以上